

## 白神山地の森と人の共生

—津軽ダムに沈む、砂子瀬・川原平によせて—

弘前大学人文学部准教授 山下 祐 介

### 1. 森と人の共生の場としての白神山地

白神山地は、広大な原生的ブナ林の価値が認められて、平成5（1993）年、ユネスコの世界自然遺産に認定された。

青森県・秋田県境に位置する白神山地に分け入ると、その山の自然の豊かさに圧倒される。我が国においてばかりでなく、いやむしろ、世界的な視点でこそ、その存在意義が認められた白神山地。この広大な樹林帯のそばで生活できることに、私は大きな誇りを感じる。

とはいえ、この山地のどこにブナ原生林があるのかと言えば、一部に限られるものようである。一見、豊かな原生林に見えるこの山地といえども、世界中の森林がそうであるように、すでにその多くに人の手が入っている。ただし、この白神山地では——青森県側においてとくに——近代的な林業の進展が遅れ、樹種の積極的な更新まで至らずに林業全盛時代を終えてしまった。そのためスギやマツといった成長の早い樹種に変更されることなく、人の営みと共生した形で、原生的ブナ林がそのまま残ったのである。

白神山地では、人間に利用はされながらも、近代的な林業が入り込んだり、あるいは人の手や気候変動によって壊滅的な事態にも至らず、大きな生態系の変動を伴わないまま、数千年にわたって人と森の共存が図られてきた。白神山地は世界自然遺産だが、こうした社会文化的側面も含めて評価されたものと考えたい。

### 2. ダムに沈む村～砂子瀬・川原平

弘前から20分、暗門の滝を目指して西目屋村に入ると、すぐに田代という集落になる。東目屋から続く、細長く山に囲まれた平地の最上端に位置するのがこの田代である。田代からさらに上流に岩木川をさかのぼるといわゆる目屋溪。だから田代は白神山地の玄関口というにふさわしい場所である。

この田代に白神山地ビジターセンターがあるわけだが、そのそばに、比較的新しい住宅団地が隣接している。この住宅団地は、現在建設が進んでいる津軽ダムの水没移転となった砂子瀬・川原平の人々の集団移転地の一つである。実はこの砂子瀬・川原平の人々が、本来はもっとも白神山地に肉薄し、そこ



(西目屋村管内図より作成)



で山の資源を活用しながら、長い歴史を重ねてきたのであった。

田代から、津軽十景の碑のある田代橋を渡り、名坪平（なつぼたい）の坂に入ると、ここから急に道が険しくなる。途中、鷹巢の崖や、岩谷観音堂のある長面（ながおもて）を過ぎ、田之尻（たのしり）橋を渡る。田之尻橋のたもとに岩木川第一発電所がある。今の目屋ダムを開発した際に建設された発電所で、第一とあるが、第二はない。発電所を過ぎると渓谷が開けて盆地が現れる。手前に、かつて集落移転で山を下りてきた高森の新集落があり、坂をあがって村市（むらいち）、さらにその先に豊平があつて、この豊平にある元村市小学校（現・村市温泉グリーンパークもりのいずみ）の隣に、毘沙門天（現鹿島神社）がある。

さらに道は藤川集落に入るが、ここから先は現在、新しい道路が完成し、大きな陸橋で岩木川をかなり上空で越しながら、右手に居森平、その奥に目屋ダムをのぞむ。トンネルを通過して、ダムサイトに出ると湖が見える。この目屋ダムのダム湖・美山湖の底には、昭和30年代に沈んだ旧砂子瀬村があつた。昭和のダム水没では、砂子瀬はさらに高台にあがって、川原平そばに集落を再建したが、いまその

新・砂子瀬集落も、さらにはその上流部にあつた川原平の集落もなくなってしまった。平成28（2016）年に完成が予定されている津軽ダムの水没地となるため、平成13（2001）年までにそのほとんどが先ほどの田代の移転地の他、ちりぢりに移ってしまったからである。

### 3. 目屋の山村文化 炭焼き、流し木、鉱山

この奥目屋に限らず、目屋の地は古くから、農業に山仕事を重ねて生業を営んできた。山仕事はおもに、弘前に搬出した薪の切り出しと、そしてまたなにより炭焼きだった。

薪の切り出しは、このあたりでは流し木で行われてきた。冬、雪のある間に、川そばまで木を切り出して運んでおく。古くは春の雪解け水、昭和のあたりでは夏の大水を使って木を川に流し、流送した。昭和のはじめまでは岩木川を使って、弘前まで流した。いまの城西あたりまで流送して、弘前の町の燃料に使ったのである。道路が開通してからは、砂子瀬・川原平のそれぞれの土場までの流し木に変わったが、その流し木も昭和35（1960）年の目屋ダム建設とともになくなってしまった。ダムで流送ができなくなったこともあるが、同時期に始まった石油



流し木（砂子瀬にあった土場）



炭を運ぶ女性

（いずれも昭和26年頃。西目屋地域生活文化調査より）

への燃料革命もあった。ちょうど時期が重なったわけである。

炭はおもに冬に焼かれた。炭の場合は、炭を焼く山に釜を設置し、男の人が焼く。奥の方の山で焼くとなれば、何日も泊まり込みで炭焼きをした。炭はスゴで編んだ炭俵につめ、女の人が背中にしょって運んだ。昭和初期に道路が開通するまでの旧道は狭い場所も多く、急な川越しもあったから馬でも運べず、すべて人が運んだのである。女の人はここに嫁いでくると、山の道を炭を背中につけて毎日のように運んだ。いま目屋人形として、西目屋商工会婦人部の手で作られ、土産物として売られているのは、こうした奥目屋の女の人々が炭を運ぶ姿を写したものである。目屋の女性はきれいだったから、女性たちが連なって歩く姿はこの地域の風物詩でもあった。目屋人形はビーチ西目屋でも手に取ることができる。おみやげにもぜひおすすめしたい。

そしてもう一つ、この地域のことで忘れてはならないのが尾太鉱山である。詳しくは省くが、津軽でも有数の鉱山が、この目屋の奥地に存在した。

#### 4. 山村文化の変容～砂川学習館の試み

こうした村々が炭俵をおろした道は、白神へと連なる道でもあり、このビジターセンターだよりでも何度も登場している菅江真澄や、平尾魯仙の一行も通った道である。しかし、現在の我々は自家用車で高速度で移動するので、この田代から砂子瀬・川原平までの道すら、さほど認識せずに通り過ぎてしまう。



砂川学習館

白神山地の山が、この周辺の人々の山村文化と強く結びついたものであるとしたら、ただ暗門の滝を見たり、十二湖を散策したりではもったいない話だ。ぜひ、この周辺の山村文化にも触れて欲しい。

その手がかりとなるのが、旧砂子瀬小学校を利用して開設された砂川学習館である。

砂川学習館は、こうした白神山麓の山村生活文化について展示し、学習するためのもので、津軽ダム建設に伴う砂子瀬・川原平の記録保存の一環としても運営されている。このダムに消えた両集落の歴史については、『砂子瀬・川原平の記憶 西目屋地域生活文化調査報告書』にもまとめられ、県内の図書館の他、東北各県の主要図書館、国会図書館などにも配架されているのでぜひごらんいただきたい。

これら奥目屋の山村生活文化をひもとくと、このあたりの地域の人たちが、白神山地の奥まで分け入り、森林を多様に利用して生活してきたことがわかる。しかしまた、より重要なことは次のことだ。

そうやって森林を活用して生きてきたのは、戦前生まれの人たちまでである。戦後、昭和四十年代にはそうした山の生業はことごとく失われてしまった。燃料革命によって薪や炭が生業として成り立たなくなった。国際貿易が盛んになることで木材価格が暴落し、林業そのものが衰退した。同様に、盛んであった鉱山も閉山する。たった数十年の間に、地域は急激な形で産業の空洞化を体験した。

白神山地の世界遺産指定、それをふまえた観光地化がいま進んではいるが、若い人たちが定住できるような雇用を十分に確保するには至っていない。過疎化・高齢化が進行し、砂子瀬・川原平もダム移転を機に消滅を余儀なくされてしまった。

#### 5. 森と人の新たな共生のあり方を考えよう

##### ～過疎・限界集落問題と21世紀の白神山地

白神山地周辺の森と人は、今後も共生できるのだろうか。

ブナ原生林でその価値が認められている白神山地だが、その背後には、この周辺の山村生活との密接な交渉があった。そうした山村の生活文化にも目を向けて欲しい、というのが、ここに訪れる人たちへ





の私のお願いである。

白神山地周辺を訪れる際に、ちょっと立ち止まって、村々を散策してみたい。そこにはいまだに息づく山の生活文化がある。これは大変貴重なものだ。と同時に、こうした地域がいま高齢化が進行し、いわゆる「限界集落」と呼ばれるような段階に入っているということにも注意を払いたい。

白神山地周辺の町村はすべて、青森・秋田県内でも過疎化・高齢化がもっとも進む地帯である。ここで取り上げたような白神山地に接近している山村の他、日本海沿岸部には漁業や海運を担ってきた多くの海村もある。これらがほぼすべて過疎地帯となっている。

自然遺産は、そのそばに豊かな社会文化的生活があってこそ、私たち人間にとっても意味あるものである。森をまもるためにも、私たち人間の生活そのもののあり方を見つめ直し、立て直していく必要がある。

この周辺の村々の最大の関心事に、猿や熊、あるいはカモシカによる獣害がある。畑のものがみな荒らされる。はては家の中まで入ってくる。生活や生業をおびやかすほどにまで、事態は進行しつつある。例えば、こうした事態をどのように具体的に解決できるのか、多くの人たちで考えていく必要がある。この地域の人たちだけではとうてい解決は不可能である。世界遺産を守るためにも、いまこそもう一度、この周辺での人間生活のあり方を考え直すことが大切なのである。自然と人間の共生は可能だろうか。地元の人だけに押しつけるのではなく、白神山地の魅力に惚れた皆さん、一緒に考えていきましょう。

平成21年7月記

---

## 白神山地ビジターセンター

- 【開館時間】 ■ 7月1日～10月31日 8:30～17:00 大型映像上映時刻 ※上映時間約30分  
(9:00・10:00・11:20・13:00・14:10・15:20・16:10)  
■ 11月1日～6月30日 9:00～16:30 (10:00・11:20・13:00・14:10・15:20)
- 【休館日】 (1) 4月～12月 第2月曜日(祝日の場合は翌日)  
(2) 1月～3月 毎週月曜日と木曜日(祝日の場合は翌日)  
(3) 年末年始 12月29日～1月3日
- 【入館料等】 入館は無料 映像観覧は有料 ●一般 200円 ●小・中学校 100円 ※団体割引(20人以上)

〒036-1411 青森県中津軽郡西目屋村大字田代字神田61-1  
Tel : 0172-85-2810 Fax : 0172-85-2833  
ホームページ <http://www.shirakami-visitor.jp/>

※42名まで収容できる会議室、工作室があります。ご利用下さい。(要申込み)  
※学校の見学や体験学習については相談をうけています。ご連絡下さい。

---